松村通信第１１３号

2020 年 12 月 8 日
松村勝弘

近代[西洋]化の問題

今回は少し難しい問題に突っ込みそうですが、分かったかぎりで書いてみたいと思います。

国民国家　一体国家・国民とは何か、分かっているつもりでも実に怪しい。例えば、日本国・日本人・日本国民・日本民族とは何を指すのか。民族というと何か人種的なものと考えがちである。しかしこう言われている。「民族とはネイション(nation)です。肌や髪の色など身体的特徴に基づいた分類のレイス(race)や血統に基づく分類のトライプ(tribe)などのように、自然科学的には区別できません。／また、日本語では『民族』と同じ語に訳される、ネイションとエスニック(ethnic)は、主権国家の意志と能力の有無で区別できます。その意志と能力があるのが、ネイション、それがないのが、エスニックです。」(倉山満[2019]『ウエストファリア体制』PHP 新書、274 頁)「意思と能力」だけでは分かったようで分からない。言語や文化でまとまっていることが多いとしても多民族、多言語の国家もある。文化での共通性はあるかもしれない。でもこれも場合によっては怪しい。極めて歴史的経路依存的なものである。とにかくひとつの政府の下でまとまっているのが国家である。

徳川時代の日本は、各藩ばらばらでひとつの国家ではなかった。徳川と言っても最大の藩であって、日本はひとつの国家ではなかった。実は[ヨーロッパ中心の国際社会で]ひとつの国家として認められないとどうなるか。

ウエストファリア体制　その前に、国民国家を規定しているのは何か。それが 1648 年のウエストファリア条約で、それは(1)国民国家の主権と民族自決、(2)国民国家間の法的平等、(3)国家間の国際法の遵守、(4)他国への内政不干渉、を規定している。ただしこれが準用されるのはヨーロッパを中心とする「国際世界」(the West)においてのみであり、それ以外は「世界の残りの部分」(the Rest)であって、「国際世界」に属する国々によって[国力がない限り]植民地化されても仕方のない「地域」でしかなかった。20 世紀中葉まではそうであった。だから、幕末の日本は国民国家となって不平等条約を受け入れても国際社会の一員になろうとしたわけである。国民国家形成が危うかった中国は、「国際世界」から切り取り自由とばかりに、国土を蹂躙され、朝鮮半島はうまく日本に植民地化されてしまったわけである(酒井直樹[2010]「東亜共同体と普遍性をめぐって－主体的技術論序説」酒井直樹・磯前順一『「近代の超克」と京都学派』以文社、161 頁)。まさに日本も近代化して西洋の仲間入りを果たしたのである。近代[西洋]化の危うさがここにある。

「近代の超克」　「近代の超克」という言葉を聞かれたかもしれない。それは明治時代以降の日本文化に多大な影響を与えてきた西洋文化の総括と超克を標榜して 1942 年 7 月、河上徹太郎を司会として 2 日間にわたり行われた座談会を中心とした特集である。西洋中心の「国際世界」で力をつけた日本が西洋から「その他」ではなくある種の西洋(≒準西洋)と認められ、しかも西洋のマネをして中国に侵略するなど居丈高になった。でもそれを正統化して西洋に認めされるロジックが必要であった。それが「近代の超克」という言葉に内包されている。それは西洋中心主義の矛盾をついていた。それは西洋による植民地化に反対する大東亜の構築の標榜であった。一方でアジアを植民地化しながら、他方で西洋のわがままを諌めるロジックとして「近代の超克」を主張したわけである。アジア民族の解放を謳ったわけである。すなわち「大日本帝国の崩壊に至るまで、日本政府は民族主義を弾圧していたが、日本の知識人の多くは民族主義へのある程度の理解を示していた。京都学派の哲学者や昭和研究会の社会科学者が中国の民族主義を肯定する議論を展開していたのはこのためである。と同時に、彼らは、民族主義のもつ人種主義的な性格も指摘することを忘れてはいない。」(酒井[2010]161 頁)このような「正統性」があるから大東亜共栄圏に多くの日本人が熱狂したのであった。この点戦後の「近代の超克」論批判では忘れられているように思われる。

ヨーロッパ発の普遍性　今の世界の主流はつまるところ、ヨーロッパ発の普遍性である。すなわち「近代は、歴史的には近代に先行するものとの関係で、また地政的には非近代、もっとはっきりいえば非西洋との関係で了解されてきた。……＜近代的＞西洋と＜前近代的＞非西洋……。」(酒井直樹[2015]『死産される日本語・日本人』講談社学術文庫、39-40 頁)「つまり、西洋は特殊を規定する普遍の契機を代表するのだ。もちろん、西洋はそれ自身ひとつの特殊でもあるが、同時に西洋は普遍的な

極を構成し、この極との対照で非西洋は自己を特殊として認知することになる。この点で、西洋は世界のあらゆる場所に遍在することになるのである。」(41 頁)という。

西洋近代と非西洋前近代、そして、日本は非西洋であるけれども前近代を脱却し、「西洋化」し、今度はそういうある種の西洋の立場から、アジアを非西洋前近代だと見下した。それが日本人の多くの対アジア観であった。そして自らを普遍視しアジアを見下した。「近代の超克」論は「普遍主義の最も醜い側面である。中国に対する日本の勝利が前提されているだけではなく、 日本人の道義的優位性があらかじめ保証されてしまっているのだ。当時の国内のマスメディアによってでっちあげられた短期的な日本の軍事的優位を笠に着て、中国人に向かって見下すような語り方ができる権利があるとでも思い込んでいるのである」(72-73 頁)とこのように言われる。「近代の超克」は、さらに、大国化した日本が西洋近代を超克してある種のポストモダン的「高み」にたっていたように思われる。確かに西洋近代に問題があることは事実であるが。

現在の中国　現在の中国は、ある種当時の日本の位置にあるように感じられる。徐涛「『中国学派』の登場？　現代中国における国際関係理論の『欧米化』と『中国化』」(『アジア研究』2012 年 4 月）という論文があったが、これを読むと、そのように感じる。趙汀陽の天下主義その他が大国化した現在の中国知識人のある種の意識を代表しているように感じられる。すなわち、

「西洋[は]……国際法ないし国際社会に加わるべき共同体の資格を『文明国＝法治国』に限定し、他の共同体を排除しただけでなく、[前掲酒井的に言えば「西洋の」－松村注]友人と同盟を結ぶ意識が働いており、同盟を結ばない他者[非西洋－松村注]が潜在的敵とされる。すなわち、カント思想を含む『西洋の政治思想の根底にあるのは自我と、疎外された他者であり、そこにあるのは分裂した世界であり、決して他者を含む全世界的なコスモポリタンではないのである』(……) 。要するに、近代西洋政治哲学は国益のための『世界に関する哲学』であり、普遍的利益を代表する『世界のための哲学』ではないのである。……そこで趙[汀陽]は、『世界のための哲学』として中国政治哲学の基礎である「天下」理論を提示する。……国家ではなく、『天下』＝世界を最も基本的な政治概念および政治原則とし、『国家-国際-世界』の認識枠組みを提供する『天下』理論は、国家主義的ではなく世界主義に基づく政治理解の方法を構築する『世界理論』として、完全な政治理論・正当な世界観として、グローバル化した世界的問題の解決に資すると趙は主張する。」(62 頁)

「米国製の主流理論を中心とする欧米製理論研究が中国における国際関係理論研究において支配的地位を占めるようになったことから、[中国学派は]『中国の国際関係理論界は米国およびその他の欧州国家の国際関係理論の競馬場と『植民地』となってしまった』[と嘆く]」「『中国学派』とは中国学者の主体意識および大国意識の自覚によって支えられ、非西洋地域の歴史・文化・国際的地位を反映するパースペクティブを求めるもの」(64 頁)という。

まさに、「近代の超克」をめざした戦前の日本の知識人がおかれていた位置に中国人知識人が今置かれているように感じられる。「大国意識」という言葉にそれが感じられる。それと同時に、彼らも西洋の「傲慢」を批判的にみているように思われる。この点は私も同感するところである。

中国は日本の失敗の轍を踏まないか？　さらに、先ほどの酒井[2010]では、「中国が超大国として登場するとき、『近代の超克』は再び現実性をもった悪夢として戻ってくるだろう。」(161 頁) このように言っている。果たして中国が今後どちらへ進んで行くのか、私には分からないが、今の中国がアジアの大国として、西洋から危険視され、戦前の日本と同じような位置に置かれていることは間違いなさそうである。このようなとき、日本はこのまま疑似西洋国として中国と対峙していていいのだろうか。日本の戦前の経験を今一度振り返っておく必要があるように思う。酒井[2010]はそういう意図で書かれたのではないだろうか。「近代の超克」論が「近代を西洋の視座からしか見ることができないから」(酒井[2010] 155 頁)問題だと指摘し、さらに国民国家、ウエストファリア体制の問題性をそのままにして、実体としての「アジアの従属性をそのままにして、アジアが目覚めたらどうなるのか。アジアが西洋を越える経済力、軍事力、政治力を獲得したとき、かつての西洋がアジアに対して行ったような支配を、今度は西洋に対して行わないと誰が言えるのか。」(157 頁)というわけである。まさに「未来への想像力の貧困でもある。それは国民という形式を唯一の主権の形態とし、国民国家を歴史化することを怠ってきたのである。」(158 頁)酒井直樹氏の主張は魅力的である。

ＨＰ，ＦＢを見て下さい。又何でも意見を。
皆さんのご意見を歓迎します。HP (http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/) もご覧下さい。**フェースブック**もやってます。また，メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい (matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。